



戦国武将 竹中家と加藤家



令和6年6月30日(日)

ワイワイプラザ垂井

主催:垂井町観光協会

共催:垂井町文化財保護協会

竹中半兵衛・重門 & 加藤光泰・貞泰

黒野城と加藤貞泰公研究会 会長 河口耕三
同上 紙芝居部会 名知勲・中村奈津子

プログラム(パワーポイント)

■はじめに

- ・加藤貞泰築城の黒野城
- ・信長・秀吉・家康に仕えた加藤家
- ・竹中半兵衛の活躍

■半兵衛と光泰の関わり

- ・「武功夜話」半兵衛の長享軒へ 藤吉郎、小市郎、光泰ら
- ・光泰・命の恩人半兵衛 横山城
- ・岐阜城下 竹中半兵衛・加藤光泰屋敷跡
- ・重門の妻に光泰娘 *1ヶ月? 姉*
- ・光泰と石田三成対立
- ・加藤家、竹中家親族も秀次事件被害者
- ・関ヶ原合戦前 大坂城の人質(竹中・加藤)救出

■紙芝居「関ヶ原」上演

■関ヶ原合戦補足

- ・関ヶ原合戦前哨戦
- ・家康の貞泰宛て書状
- ・関ヶ原の戦い陣立書
- ・布陣図紹介(竹中丹波守・加藤左衛門尉・黒田甲斐守)
- ・記述文献
- ・本戦
- ・研究会では

■関ヶ原後の両家

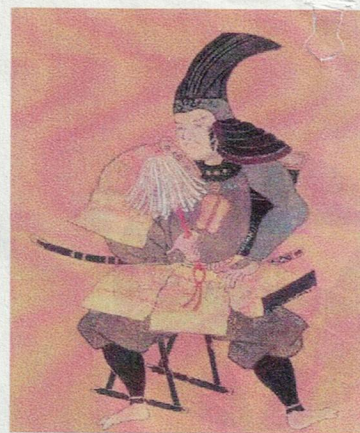
竹中家と加藤家の関係

竹中半兵衛重治(1544～1579)と加藤遠江守光泰(1537～1593)は、光泰が半兵衛より7才年上。共に美濃出身の武将として戦国時代、齋藤氏に仕え豊臣秀吉の家臣となっても多くの戦場で行動を共にしてきた盟友の間柄であったのであろう。

◆ 命の恩人半兵衛

元龜2年(1571)9月、江州浅井長政・越前朝倉義景との小谷城攻めでは、信長の命で秀吉が江州横山の砦を守備する。光泰もその一人。秀吉岐阜に赴き留守のとき、浅井勢一千余騎不意に城を攻める。竹中半兵衛、城の留守として、皆々城の内に引き入り城を守る。光泰一人槍を取り城門の外に進み出て力戦する。敵数十人これを囲む。中にも浅井の野一色助七と太刀討ちにて挑み大疵を蒙る。左の膝口痛手(重傷)になり、既に危うく見えしとき、竹中半兵衛、門を開き助け戦に依って敵引取、光泰死を遁れる。光泰手を負いたるを見て、家人寺嶋戸一郎勝正の肩に掛けて帰る。これより光泰歩行常ならず、小脚跛(ちんば)になると云う。

(加藤家家史「北籐録」光泰之伝上より)



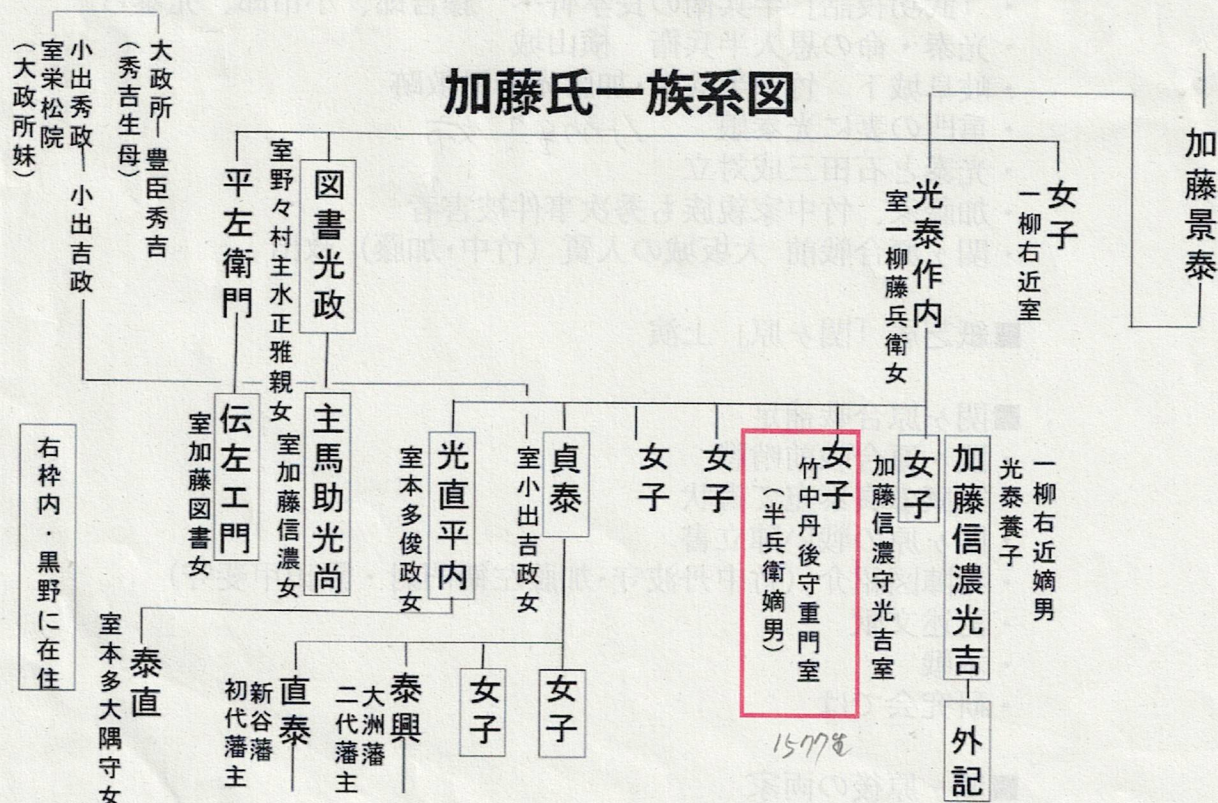
竹中重治画像
(禅幢寺所蔵)
ウィキペディアより



加藤光泰画像

◇ 重門の妻に光泰娘

光泰にとって半兵衛は命の恩人。天正7年(1579)半兵衛が播磨三木城攻めの陣中にて死去した。享年36歳、半兵衛の嫡男重門は7歳のときである。(加藤光泰の嫡男貞泰はこの翌年の天正8年に生まれる)戦場での二人には絆が生まれたであろう。その後、重門の妻に光泰の二女(貞泰姉)を嫁がせた。重門は天正16年(1588)に家督を相続、従五位下・丹後守に叙位・任官している頃と思われる。



美濃国黒野城主4万石 加藤左衛門尉貞泰

◇ 加藤貞泰はなぜ黒野へ

加藤貞泰の父光泰は豊臣秀吉に仕える実戦経験豊富な武将。光泰は甲斐国24万石の国主だったが、文禄の役で朝鮮出兵中に死去。

光泰は遺言で、「甲斐は肝心要の国、息子貞泰は若年で荷が重く、生国近くに移されるよう頼みます。」と五奉行の一人である浅野長政に託した。死去4ヵ月後、貞泰は家督を相続し、秀吉の温情があつたのか、ふるさと岐阜へ4万石に減封となり国替え。新たに黒野城を築いた。

◇ 貞泰・岐阜市生まれ武将

貞泰の生誕地は、高野山墓石調査で岐阜の橋詰(現市役所南東)であったことが判明。

関ヶ原合戦への予兆

◇ 父光泰と石田三成は対立関係

光泰は、朝鮮の役で石田三成らと撤退論で意見の対立。光泰朝鮮で病死。(毒殺説も)加藤家では24万石から4万石への大減封で三成への恨み。

◇ 加藤家・竹中家 秀次事件の被害者

加藤家の記録には一切記されていないが、黒野へ国替え翌年の文禄4年(1595)、関白秀次事件が勃発し、秀次の家臣も連座切腹をさせられた。その一人に加藤家と濃い親族である美濃今泉村生まれの一柳右近可遊(桑名城主6万石)がいた。

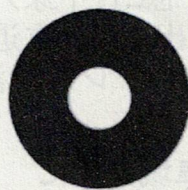
可遊の妹が光泰の妻(貞泰母)、可遊の妻は光泰の姉、その長男信濃光吉は、光泰の長女に養子で加藤家に入り、貞泰の家老で重臣。という一柳家とは濃い親族関係でした。

また、竹中重門の妻は、光泰の娘でもあり、貞泰と義兄の関係。竹中氏一族の娘も秀次の側室で母子とも被害者になったことから、両家は、秀次事件処理に関わっていた石田三成に恨みを抱いていたと筆者は想像する。

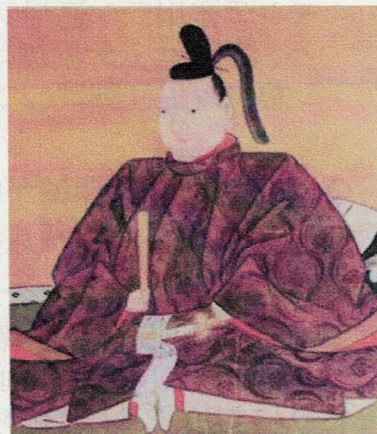
秀次事件の被害者は、いずれも関ヶ原では家康に味方した。

◇ 関ヶ原合戦前 貞泰・重門が大阪城へ送った人質救出

加藤家文書『北藤禄』巻之九 貞泰之伝(61・62頁)



加藤家の家紋
蛇の目紋



加藤貞泰画像 大洲竜護山蔵



関ヶ原役図(部分)
「武家事紀」収載



四戦図屏風(部分)黒野城
岐阜市歴史博物館蔵



現在の黒野城本丸跡(岐阜市史跡)
Google Earth衛星画像



現在の黒野城跡 南側土塁

◇ 丸山烽火場布陣の記述文献(二次史料)

- ・『綿考輯録』第二巻 卷十六(348、349頁)
関ヶ原町ニ而高田屋九兵衛と申者、御合戦の次第を先祖以来伝来

合川山口より三丁程東の山手丸山といふ所ニ、黒田甲斐守・加藤左衛門尉・竹中丹後守、此所より松尾山西方筑前中納言之備迄道法三十式丁有、右丸山烽火也・・・

- ・『明泉寺旧記 過現二世牒』垂井町岩手明泉寺蔵

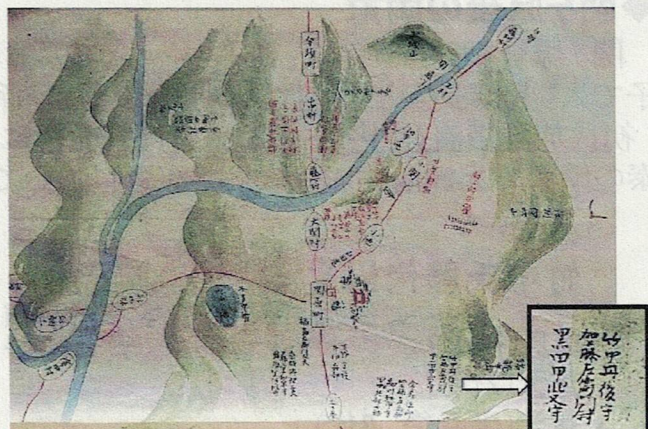
犬山之城主、石川備前守ニ加勢、其後 神君公へ属ス加藤左衛門、縁者ニ而、陣所モ一所故・・・

- ・『関東御合戦当日記』「関ヶ原合戦史料集」(391頁)

瑞竜寺ノ丸山ニ黒田甲斐守・加藤左衛門尉・竹中丹後守陣ス・・・

- ・『関ヶ原御合戦物語』大垣市立図書館蔵
宝永3年(1706)に竹中家の古記を七代目竹中重栄が編纂

竹中丹後守重門ト加藤左衛門尉貞泰ト陣所一壘ニ・・・



「濃州関ヶ原合戦図」部分
加藤氏文書「北藤録」所収



加藤貞泰関ヶ原足取り

◇ 9月15日本戦

- ・加藤家文書には、細川忠興、稲葉貞通、加藤貞泰は中筋島津義弘と取り結ぶと戦況を詳しく記述しているが、島津の家史には、島津の退き口以外は戦をしていないという。

◆ まとめ

加藤貞泰は、大関家文書の徳川方の陣立書のごとく、岡山陣所から関ヶ原へ向かい、丸山烽火場附近に黒田長政、竹中重門と共に布陣。

開戦後、黒田長政の鉄砲隊が、石田三成の重臣、島左近を討ち取るなどの功績をあげた。

関ヶ原の地形に詳しい竹中重門や貞泰らの連携があつてこそ。

※ NHKプラタモリで黒田鉄砲隊の活躍が紹介。

- ・犬山城加勢衆は関ヶ原に参戦し、徳川の勝利に貢献。所領加増や本領、禄高安堵された。



NHKプラタモリ 烽火場で
映った加藤貞泰の旗
2023年(令和5年)6月24日

関ヶ原古戦場 丸山烽火場
加藤貞泰電柱看板
2016年～設置 →



■ 研究会では

- ・岡山(丸山)烽火場に黒田長政・竹中重門と共に加藤貞泰名の追記を申請中。

関ヶ原古戦場の案内板、マップ類に
加藤貞泰の名を！
＝貞泰公没後400年行事のテーマ＝

◆関ヶ原後の両家

関ヶ原合戦から57年後、加藤氏一族で大洲藩代々家老職（一柳右近の嫡男・光泰に養子で入り光泰長女と結婚した加藤信濃）の子孫と竹中家の関係。

初代加藤信濃（黒野城家老）の3代目光信に男子がなかった。光信死後、加藤泰興（貞泰の嫡男で大洲藩主2代目）は、江戸に於いて竹中重門の子重常（加藤泰興従弟）に約束。

竹中氏歴代当主と加藤家関係

引用文献

・加藤氏文書「北藤録」卷之二十 家臣世系 加藤一柳氏系

- ・重氏(初代)
 - ・重元(2代)
 - ・重治(半兵衛、3代)
 - ・重門(4代)..... 室 加藤光泰娘(貞泰姉)
 - ・重常(5代)..... 竹中重常と加藤貞泰の嫡男泰興(大洲藩主2代目)はいとこ、江戸屋敷に於いて泰興は重常と約束。
 - ・重高(6代)
 - ・重長(7代)..... 重常の6男重貞(8歳)は、大洲藩加藤家代々家老職3代目光信に男子がなく加藤家の養子に。禄1000石を与え、光信二女と結婚。加藤家の家老職を勤め、その後加増500石、都合1500石領す。
 - ・重栄(8代) ← しげよし
 - ・元敏(9代)
 - ・元儔(10代) ← ちかかず
 - ・重寛(11代)
 - ・重光(12代)
 - ・重知(13代)
 - ・重明(14代)
 - ・重固(15代) ← しげかた
- 重長に男子無く、先の加藤重貞の嫡男元儔（竹中主膳・重栄）を交代寄合の7代目竹中主殿重長の養子となり、濃州岩手に於いて5000石を領す。
よって加藤家では次男高茂（玄番）が家督を継いだ。
また高茂の弟元美は分地河内国の御旗本竹中彦八郎の養子となり1000石を領す。

当時このように竹中家と加藤家に姻戚関係が結ばれ、大洲と岩手の両家はお互いの家督を守って交流していた。

追申

2013年の6月19日、研究会13名で岩手の禅懂寺（竹中半兵衛の墓）を訪問したとき、墓に「大洲家先祖の墓」を見つけた。寺の女性に尋ねると大洲から来たので大洲姓を名乗ったと伝えると言う。他にも他寺に寺嶋という苗字があり、元は美濃の出身だが大洲に行き、今は近くに子孫が住むと禅懂寺の女性が語る。女性は大洲の加藤家についてはご存じではなかった。

ちなみに黒野城下の慶長15年御縄打水帳（検地帳）に寺嶋姓3人の名がある。寺嶋家は美濃出身で近江の横山城で光泰を救った家来の一族。（「北藤録」によると寺嶋姓は橋詰庄時代 から光泰に最初から仕える家臣）

貞泰が美濃国黒野から伯耆国米子、伊豫国大洲へと国替えにより、城主だけでなく多くの家臣や従者も共にし、又後世まで繋がりがあったことは新たな発見でもありました。

2018年11月9日に岩手の「竹中半兵衛顕彰会」の皆さんとの交流を初めとして、今回の講演を機会に、今後、垂井町と大洲、黒野との交流が広がることを期待します。

ご静聴ありがとうございました。